

青竹正一名誉教授記念号の発刊によせて

学長 秋 山 義 昭

このたび、商学討究第53巻第2・3合併号を発刊するにあたり、長年本学の発展に尽くされた小樽商科大学名誉教授青竹正一先生のご功績を讃え、本号を「青竹正一名誉教授記念号」とすることに致しました。

先生は、1967年に北海道大学法学部を卒業後、同大学大学院法学研究科修士課程に進学、1969年に同課程を修了されました。同年直ちに北海道大学法学部助手となられ、1972年4月に本学講師として着任されました。翌年10月に助教授に昇任され、1980年に名古屋大学より法学博士の学位が授与されました。助教授昇任から9年後の1982年10月には、38歳の若さで教授に昇任しておられます。

本学に着任以来、先生は、研究・教育に情熱を注がれたことは勿論のこと、人事委員会、自己評価委員会など、多くの重要な懸案事項を抱える委員会の委員長を勤められ、法律家らしい説得力ある論理を展開して、錯綜する意見をまとめ、困難な問題の解決にあたられました。

本来であれば、本学の評価と名声を一段と高めるためにも、先生にはぜひとも定年まで本学に留まっていたただきたかったのですが、大変残念なことに、請われて2002年4月より千葉大学法経学部の方へ転出されました。法人化を控え、今後とも何かと厳しい状況に直面するであろうこの時期に先生を欠くのは、本学にとって本当に大きな痛手であることは言うまでもありません。

青竹先生のご専門は商法ですが、結論の妥当性を重視する現実的な学風で、現代の商法学界における指導的立場におられます。先生は、きわめて多数の著書・論文を著されておりますが、特に、1979年にはアメリカ会社法の研究を中心とする『小規模閉鎖会社の法規整』を、1988年にはその続編である『続小規模閉鎖会社の法規整』を、1995年には企業金融問題などにも焦点を当てた『現代会社法の課題と展開』を公刊されました。そして、昨年出版された『閉鎖会社紛争の新展開』では、再び閉鎖会社法に焦点を絞られ、株式・有限会社持分の共同相続をめぐる問題や新株の不正発行をめぐる問題など、最近における最高裁判決を素材として今日切実な問題となっている諸点を詳細に論じておられます。これらの業績は、学界でも大いに注目されることとなり、商法学界最高の名誉といえる大隅健一郎賞を2001年度受賞されました。

青竹先生の以上のような精力的なご活躍に対し、本学教授会は、教育上、学術上特に功績が顕著であって、本学発展のために多大のご貢献をいただいたものと認め、小樽商科大学名誉教授の称号を授与することと致しました。

先生は、現在、千葉大学で研究生活を続けておられますが、時代の流れに敢えて逆行する例の手書きの原稿で、これからも一層学界のために寄与されることをご祈念申し上げ、記念号発刊のご挨拶といたします。